

## クィア言語学—トランスジェンダーの言語実践

*Queer Linguistics: Linguistic Practices of Japanese Transgender Speakers*

Keywords: queer クィア, linguistics 言語学, transgender トランスジェンダー, linguistic practice 言語実践, Japanese 日本語, indexicality 指標性

Work in the area of language and sexuality (Queer Linguistics) has provided many instances of how queer speakers negotiate grammar to fit their desires and needs. This study discusses how the intersection of grammatical and social genders, entwined in the core structure of language, can be analyzed to pinpoint a transgender individual's dynamic status —(some temporal in-between status; some, permanent) of self-hood. It further demonstrates how transgender speakers negotiate their subject position by manipulating a specific indexical value and/or meaning attached to certain linguistic features.

When we *do language*, we are not necessarily conscious of grammar; yet our speech is often constrained by the specific grammar of the language we speak. As a native speaker of Japanese, for instance, I am most conscious about the proper use of honorifics and reference/address terms expected in a specific social context. We Japanese speakers have to pay special attention to these linguistic categories as they express stances toward ongoing interaction that are also often gendered. No matter what language we speak, each of us experiences different types of challenges in doing language since the rules of a given grammar place limits on what can be expressed. The constraining effects of grammar are perhaps most acute for individuals who identify as transgender, as

this research demonstrates. Yet these constraints are not always acknowledged by speakers themselves. This study is based on fieldwork conducted over 7 years (2011 through 2017) in various places in Japan.

## 序

英語圏におけるトランス・アイデンティティについては、20世紀終わり頃から頻繁に書かれてきている。今では、トランスの存在は政治的な場だけでなく、教育、法律の分野などにも活発な議論を促し、メディアでそれに関連したニュースや記事を見ない日がないほど、我々の身近な問題として捉えられている。もともとクィア理論で語る「アイデンティティ」はその「固定性」や「一貫性」への懐疑を示す概念として捉え、人間の持つ「アイデンティティ」を内的な本質や身体に付随された何かではなく、言説や関係性において構築されたものであると認識された。それゆえ性的マイノリティのアイデンティティも、社会的、歴史的構築物と捉える。Jogose はアイデンティティを「文化的幻想」だと主張し、「はっきりした事実」でもなく、「統一的」でもなく、「変化する」ものだと語る<sup>1</sup>。

トランス・アイデンティティを持つトランスジェンダーとは自分が生まれた文化のコンテキストの中で与えられ、決定づけられた「男」か「女」の性・ジェンダーに異議を申し立てる個人。またそのジェンダーに付随した性役割を拒否し、さらに「女」や「男」というラベルに疑問を持つ、あるいはジェンダー自体の存在を疑う 個人のことも指す。日本でもここ 2、3 年 LGBT という言葉を新聞などで見るが多くなったが、その中の「T」である。私がインタビューした当事者はこの頭文字語の意味を知っている日本人は全体で 20%に満たないだろう、と語った。また、トランスジェンダーの人々のほとんどが、LGBT の T は「違う」、「LGB」と「T」を一緒に語るのは無理だという。「T」はセクシュアリ

---

<sup>1</sup> Annamarie Jagose. *Queer Theory: An Introduction*. New York University Press, 1996.

ティだけでなく、ジェンダーの部分でもっと複雑な現実がある。

英国では、2015年のオックスフォード辞書に、「Mx」という、性別を表さない敬称が記載された。「Ms」「Mrs」「Miss」「Mr」にとってかわる「女」「男」を明示しないこの敬称は、英国では、もうすでに銀行や政府関係の書類で使用されている<sup>2</sup>。英国のRBS銀行(Royal Bank of Scotland)では、「mother」「father」などの言葉についても再検討しているという。「母」「父」といったジェンダーを明記する言葉の見直しは、「女」「男」という自然で、当たり前だと思われていた「性・ジェンダー」が、現実では、そうははっきり「定義」できるものでもなく、本質的主義に支えられてきたジェンダーの2項立制に疑問を投げかけたのである。言葉が、やっと多様な性・ジェンダーの現実を追いつこうとしている<sup>3</sup>。

さて、我々が言葉を行う時(do language)、我々はその言語の持ついろいろなルールを意識していない。しかし現実には、無意識にその言語のルールに従って話していることが多い。例えば日本語話者は敬語を意識せずに他人と話すことはできないし、人称代名詞もその場面に適切な、社会的に受け入れられたものを選んで使用している。日本語の場合、英語に比べて言葉自体がジェンダー化されていることが多く(もちろんそれは、理想化され、イデオロギー化されたジェンダーだが)、その面では、より多くの注意が必要になってくる。私自身「女」として生まれて「女」として生き、言語のルール(例えば「わたし」を使うこと)は「自然」なものとして受け入れてきた。あまり深くは考えなかった。しかし性の多様性と言語の関係を研究するようになり、現実はかなり複雑であることがわかってきた。「自然」だと思っていた言語実践はバトラーも語っているように「パフォーマンス」であり、何度も繰り返し行うことによって「自然」に聞こえているだけなのである。「ジェンダー」は「らしさ」の構築であり、その「らしさ」は自分が育った文化の中で無意識にあるいは意識的に再現され、維持され、あたかもそれを「自然発生的」なものとして受け入れてきた。

---

<sup>2</sup> *The Sunday Times*, May 3 2015.

<sup>3</sup> *The Times*, November 17 2014.

ティだけでなく、ジェンダーの部分でもっと複雑な現実がある。

英国では、2015年のオックスフォード辞書に、「Mx」という、性別を表さない敬称が記載された。「Ms」「Mrs」「Miss」「Mr」にとってかわる「女」「男」を明示しないこの敬称は、英国では、もうすでに銀行や政府関係の書類で使用されている<sup>1</sup>。英国のRBS銀行(Royal Bank of Scotland)では、「mother」「father」などの言葉についても再検討しているという。「母」「父」といったジェンダーを明記する言葉の見直しは、「女」「男」という自然で、当たり前だと思われていた「性・ジェンダー」が、現実では、そうははっきり「定義」できるものでもなく、本質的主義に支えられてきたジェンダーの2項立制に疑問を投げかけたのである。言葉が、やっと多様な性・ジェンダーの現実に追いつこうとしている<sup>2</sup>。

さて、我々が言葉を行う時(do language)、我々はその言語の持ついろいろなルールを意識していない。しかし現実には、無意識にその言語のルールに従って話していることが多い。例えば日本語話者は敬語を意識せずに他人と話すことはできないし、人称代名詞もその場面に適切な、社会的に受け入れられたものを選んで使用している。日本語の場合、英語に比べて言葉自体がジェンダー化されていることが多く(もちろんそれは、理想化され、イデオロギー化されたジェンダーだが)、その面では、より多くの注意が必要になってくる。私自身「女」として生まれて「女」として生き、言語のルール(例えば「わたし」を使うこと)は「自然」なものとして受け入れてきた。あまり深くは考えなかった。しかし性の多様性と言語の関係を研究するようになり、現実はかなり複雑であることがわかってきた。「自然」だと思っていた言語実践はバトラーも語っているように「パフォーマンス」であり、何度も繰り返し行うことによって「自然」に聞こえているだけなのである。「ジェンダー」は「らしさ」の構築であり、その「らしさ」は自分が育った文化の中で無意識にあるいは意識的に再現され、維持され、あたかもそれを「自然発生的」なものとして受け入れてきた。

---

<sup>1</sup> *The Sunday Times*, May 3 2015.

<sup>2</sup> *The Times*, November 17 2014.

私がここで扱う「トランスジェンダーと言語」というテーマは、1990年の初期から確立された「クィア言語学」の分野に入り、私は研究者として、「レズビアンと言語」「ゲイ男性の言語」「オネエ言葉」「昭和の男娼の言葉」などのテーマで研究し、論文を書いてきた。4、5年前からトランスジェンダーの研究を始めたのだが、その複雑さ、多様性は私の理解を超えるものがある。改めて、「日本の性文化」の深さと広さを感じずにはいられない。私が扱うテーマは、トランスジェンダー（この論文では男性から女性に移行した個人を扱う）と自己認識する話者が、そのアイデンティティを言語でどのように表現するかの研究である。社会言語学の分野で議論されてきた「言語的女らしさ」は果たしてヘテロの「言語的女らしさ」と同じなのか、異なるのか、2人のケースを見て検討していきたい。

私がインタビューをしたトランスジェンダーの人たちの中には、自分を「性同一性障害者」だと認識して「性移行」する人もいれば、その「病理化」には強く反対する人もかなり多い。この問題は英語圏でも複雑な現実を提示している。英語では、David Valentine (2012:201)などは、「病理化」を拒否するトランスジェンダーを「transsexual」（「s」が一つ）として、「transsexual」と区別をして議論している<sup>4</sup>。Kate Bornstein (1994:118)も「私がトランスセクシャルなのは、自己の選択であり、病理によるものではない」と語る<sup>5</sup>。しかし、GID.jpの山本蘭氏は、自分が性同一性障害者であり、そのsexed bodyから自由になるには性適合手術しかない、と語り「トランスジェンダー」という言葉さえ「拒否」する人も存在するのが現実である。これは、どちらが正しいか、という問題というより、あくまでも自己認識の違い（病理か生き方の選択か）であり、その違いを尊重すべきである、と私は考えている。

日本では1996年に埼玉医科大学が「性同一性障害」を「疾患」だという認識

---

<sup>4</sup> David Valentine, “Sue E. Generous: Toward a Theory of Non-Transsexuality.” *Feminist Studies* 38, 1 (2012):185-211.

<sup>5</sup> Kate Bornstein, *Gender Outlaw*. New York and London: Routledge, 1994.

を示し、1997年に法的に認められた性適合手術が開始された<sup>6</sup>。1999年には「GID（性同一性障害）学会」が設立し、毎年3月に学会が開催されている<sup>7</sup>。2003年には「特例法」が公布され、2004年に施行された<sup>8</sup>。5つの条件が整えば戸籍上の性別が変更できるようになったのである。二十歳以上であること。現に婚姻をしていないこと。現に未成年の子がいないこと。生殖腺がないこと、または生殖腺の機能を永続的に欠く状態にあること。その身体について他の性別に係る身体の性器に係る部分に近似する外観を備えていること。2016年の時点で6909人が性別の変更をしている<sup>9</sup>。

私が研究を始めたのは、岡山大学の中塚幹也教授を訪ねた2011年からである。私はこの研究を始めて40人ほど（ほとんどが男性から女性に移行した人たち）にインタビューを行った。中塚教授から岡山大学のジェンダークリニックの何人かを紹介してもらったのがこの研究の出発点だった。

## I. 言語とジェンダー研究

「言語とジェンダー研究」を語る時、まず思い浮かぶのが20世紀の初めになされたネイティブアメリカン言語におけるジェンダー比較の研究である。主に音韻学の分野でなされ、Franz BoasのInuktitut（エスキモー）の研究（1911）<sup>10</sup>やRuth BunzelのZuni（1933）<sup>11</sup>、Mary HaasのKoasati（1944）<sup>12</sup>、Edward Sapir

<sup>6</sup> 現実にはこれ以前に手術が行われている。1951年の永井明子（日本医科大学）や1964年の3人の男性セックスワーカーの手術（ブルーボーイ事件）。

<sup>7</sup> 事務局は岡山大学大学院保健学研究科の中塚研究室。

<sup>8</sup> 性同一性障害の性別の取り扱いの特例に関する法律。2004年に施行された。

<sup>9</sup> 2006年までは、男性から女性に変更した人の数が女性から男性に変更した人の2倍近かったが、現在はそれが逆転している（男性から女性：1,786人・女性から男性：5,010人）。GID.jpのサイトに掲載 [http://gid.jp/html/GID\\_law/index.html](http://gid.jp/html/GID_law/index.html)。

<sup>10</sup> Franz Boas, *Handbook of American Indian Languages*, Bulletin 40, Washington: Bureau of American Ethnology, 1911.

<sup>11</sup> Ruth Bunzel, *Zuni Text*. New York: G. E. Stechert, 1933.

<sup>12</sup> Mary Haas, "Men's and women's speech in Koasati." *Language* 20 (1944):142-149.

の Yana (1929)<sup>13</sup> などで性差が報告された。また、語系論の分野でも同じような差異が認められ、男性形「*au-na'fire' / au-nidja'my fire'*」は、女性形「*au'fire' / au-nitc'my fire'*」より長いとか、疑問形、命令形などでの違いなどが指摘されている (Sapir 1929)。これらの研究は、女男で使い方がはっきり分かれている (sex-exclusive) という認識であったが、90年代に入り、Sara Trechter (1995:10-16) による Lakohta の clitic (接語) の研究を通して、単なる性差ではなく、もっと複雑な要因があることが指摘された。Trechter は、話者の(1) 社会的地位、立場、姿勢 (2) ジェンダーや性嗜好 (3) 対話者との関係や年齢差 (4) そのコンテキストにおける言語知識、などが接語使用を導くと、分析した。彼女の研究により、「性差は単にその言語のルール」だという主張から、その性差は、社会的、性的、政治的、言語的要因が複雑に交差した結果なのだと認識されるようになった<sup>14</sup>。

このように、20世紀初めの「性と言語」の関係を探る研究は、「性」は本質的に「女」と「男」という二項対立を前提になされた。その後「性」が社会的、文化的に構築された「ジェンダー」に代わり、「女・男」は同じ線上に水平的に連続して並存するものだと考えられるようになった。ジェンダーの視点から見た言語研究が始まったのは、70年代の Robin Lakoff (日本では寿岳章子) を出発点とし、「女・男はこう語られる」「男・女はこう話す」という言語使用におけるジェンダー差を探る研究から「女らしく話す」ことの意味、「なぜ女らしく話すことが好まれるのか」の研究に移行した。これらは何が「言語上での女らしさ・男らしさ」を作り上げるのか、への疑問であった。それは、「女・男はどう話す」の追求を超え、どういう言語使用が女らしさ・男らしさというジェンダー形成に貢献しているか、を分析する研究であった。しかし、そのジェンダーも結

<sup>13</sup> Edward Sapir, "Male and Female Forms of Speech in Yana," in *Donum Natalicium Schrijnen*, edited by St. W. J. Teeuwen, 79-85. Nijmegen-Utrecht: N. V. Dekker and van de Vegt, 1929.

<sup>14</sup> Sara Trechter, "Categorical Gender Myths in native America: Gender Deictics in Lakhota." *Issues in Applied Linguistics*, 6.1 (1995): 5-22.

局は「女」と「男」という2極化、分離されたカテゴリーを作り出し、理論的には平等で、この「男女」の差は水平的に並存しているものだと理解されていても、結果的に、これらの研究は話者をそのどちらかに当てはめることになってしまった。

セックスとジェンダーの区別を生物的・社会的なものであるとし、それで1980年代は納得してきた。しかし1990年のバトラーによる「セックス」そのものを解体する論文が出され、そのセックスとジェンダーの区別は曖昧になり、実は両方とも社会的に構築されたものである、という議論がなされた。そして「ジェンダー」を「セックス」を基にして構築された社会的性という認識ではなく、その社会的性として認識されているジェンダーが実は「セックス」という虚構を構築したのだ、と議論された。「女・男」で「ある」ことは「自然な事実」なのか、「行為・パフォーマティブ」なのか。「女・男」というカテゴリー自体が「存在」しえるのか。「本物」と「偽物」の「女・男」の区別はできるのか。する必要はあるのか。バトラーが問題視したジェンダー、セックス、セクシュアリティに関する議論は、今まで自分が「所有」していたと信じていたアイデンティティが実は「固定」「安定」「確定」したものでなく、「不確定・不安定」でしかも「反復」の行為によって「生産」されるに過ぎない、と理解されるようになる。この理論が社会・人類言語学の分野に大きく影響を与え、「セクシュアリティと言語」の関係を探る研究へと繋がっていった。それは、「クィア言語学」と呼ばれ、今までのヘテロの言語使用研究から性的マイノリティを対象とした研究が始まったのである。「クィア」は元々「奇妙な」という意味を持つ英語で、俗語としてゲイ男性をさす蔑称として使われていた。それが、レズビアンを語る「ダイク」と同様、当事者が自称として使うことで、肯定的な意味を持つ言葉に転化していった。その後レズビアンや他の性的マイノリティの人々も含み、個々の差異を超越した連帯の可能性を模索するハイブリッドな包括的概念となっていった。

世界の言語を見る時、インド・ヨーロッパ語族の多くが *linguistic gender* (LG) を持つ。この現象を *arbitrary* (恣意的) と考えるか、社会的・政治的に操作さ

れたものとするかは今も議論されているが、そんな LG を持つ言語の中で面白い例がある。ヘブライ語は、文法上の「feminine-女性性」と「masculine-男性性」があるが、1 人称にはジェンダーによる区別はなく、2 人称と 3 人称の単数・複数形の両方に LG が現れる (Tobin, 2001:179)<sup>15</sup>。このヘブライ語には、「gender reversal」と呼ばれる現象があり、男性話者が親しい女性や親戚、パートナーを男性代名詞で呼ぶことがある。また、男性だけではなく、女性も自分や自分以外の女性を男性代名詞を使って呼ぶことがある。この場合、イントネーションが上昇気味で、いわゆる pillow talk とか baby talk とか呼ばれる話し方に似ていると言われている (Tobin, 185-186)。同じような現象が、ヒンディー語でも見られる。若い女性や娘に対して親しい感情を表す時「*beṭī* ‘girl’ (fem. sg) 」ではなく、「*beṭā* ‘boy’ (masc. sg) 」を使う (Hall, 2002:145)<sup>16</sup>。この現象を私のインド人の同僚は「女性は社会的地位が低いため、男性名詞で呼ぶことによってその女性の地位を上げる、あるいは話者の尊敬の意味を表す」と話した。彼女自身、子供の時に父親から「*beṭā*」と呼ばれたと語った。また、アラビア語では、女性名詞・代名詞・形容詞・動詞を男の子を呼ぶ時に使い、反対に女の子を男性名詞・代名詞・形容詞・動詞で呼ぶことができるし、ロシア語でも、女性の話者が若い女性を男性名詞「*moj horoshiji* ‘my good one’ (masc.)」で呼ぶことがある (Aikhenvald, 2016:105)<sup>17</sup>。

これらの現象と反対のことが他の言語で報告されている。Rosenhouse と

---

<sup>15</sup> 二人称は、*at* (fem. sg), *atah* (masc. sg), *aten* (fem. pl), *atem* (masc. pl) で、三人称は *hi* (fem. sg), *hu* (masc. sg), *hen* (fem. pl), *hem* (masc. pl) となる。この中の *aten* と *hen* は文学やメディアでの使用が中心で、*atem* と *hen* が普段は使われる (unmarked form)。Yishai Tobin, “Gender Switch in Modern Hebrew,” in *Gender Across Languages: The Representation of Women and Men Vol.I*, edited by Marlis Hellinger, and Hadumod Bußmann, 177-198. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company, 2001.

<sup>16</sup> Kira Hall, “Unnatural’ gender in Hindi,” in *Gender Across Languages: The Linguistic Representation of Women and Men*, Vol. 2, edited by Marlis Hellinger, and Hadumod Bußmann, 133-162 Amsterdam: John Benjamins Publishing Company, 2002.

<sup>17</sup> Alexandra Y Aikhenvald, *How Gender Shapes the World*. Oxford: Oxford University Press, 2016.101-109.

Dbayyat (2006)のパレスチナのアラビア語 (Palestine Arabic)の研究の中で、女性が異常な不快さや否定的な感情を表現する時(例「疲れた、悲しい、不幸せ」)に男性一人称を使用する<sup>18</sup>。gender switch と呼ばれる現象である。また、北アフリカで話されるベルベル (Berber) 語では、女性を蔑んだりする時には、女性を男性名詞で呼ぶことがある<sup>19</sup>。これらのすべての例は、女性に関してであるが、男性についても数は少ないがいくつか見られる。ペルーの Michiguenga 語、パプアニューギニアの Manambu 語、エチオピアの Amharic 語などでは、男性を女性名詞で呼ぶことがある。理由は、「親しみや連帯」を表す時もあれば、その反対に「差別的、軽蔑」を表現する時にも使われる<sup>20</sup>。

## II. 性的マイノリティの言語研究

1990年代からのクィア言語学の分野では1997年に *Queerly Phrased*<sup>21</sup>が出版され、その後 *Journal of Language and Sexuality*<sup>22</sup>が刊行され、最近の *Queer Excursion*<sup>23</sup>など、英語圏だけではなく、多言語にわたって研究がなされている。最初はゲイ・レズビアン言語使用の研究が多く見られた。例えば Livia (1997)の研究は、フランス人のゲイ男性が、自分たちの仲間を「女性代名詞」を使って呼び合ったりすることの意味を研究した<sup>24</sup>。また、ブッチフェミが小説の中で、自分たちのセクシュアリティを表現するために、いかに LG を巧みに操作して

<sup>18</sup> Judith Rosenhouse and Nisreen Dbayyat. "Gender Switch in Female Speech of an Urbanized Arabic Dialect in Israel," *Anthropological Linguistics* 48 (2006):169-186.

<sup>19</sup> Aikhenvald, 103.

<sup>20</sup> Aikhenvald, 101-109.

<sup>21</sup> *Queerly Phrased: Language, Gender and Sexuality*, edited by A. Livia and K. Hall. New York: Oxford University Press, 1997.

<sup>22</sup> John Benjamins Publishing Company.

<sup>23</sup> *Queer Excursions: Rethorizing Binaries in Language, Gender and Sexuality*, edited by L. Zimman, J. Davis, and J. Raclaw, New York: Oxford University Press, 2014.

<sup>24</sup> "Disloyal to Masculinity: Linguistic Gender and Liminal Identity in French," in *Queerly Phrased*. 349-368.

いるかを描いた<sup>25</sup>。その後、少しずつではあるがトランスジェンダー話者の研究が見られるようになる。Blackwood (2014)のインドネシアの性的マイノリティの研究では、トランス男性がインドネシア語の「中性性」の二人称（フォーマルな *anda* や、くだけた *kamu*）ではなく、意識的に Minangkabau 語の「男性性」の二人称 (*wa'ang*)を好んで使うことを発見し、このトランス男性の男性性の二人称の使用が、男性としての自己確立をアピールするものであると指摘した<sup>26</sup>。また、*waria* と呼ばれるトランス女性（男性のパートナーがいる）の研究では、彼女らが喧嘩をする時は、お互いを「*kau*」という「女性性」の二人称を使うが、その反対に仲間同士の連帯感を強調したい時には「男性性」の「*wa'ang*」を使用すると指摘した<sup>27</sup>。

Bershtling (2014)のヘブライ語の研究では、性的マイノリティ（ジェンダー・クィア・アイデンティティをもつ話者）による人称代名詞の使用について調査し、この性的マイノリティの人々がLGを巧みに操作し、自分たちの独自の言語使用をしていることが報告されている。これらの話者はその言語におけるルールを自分たちで斬新的に作っているのである。例えば、(1) LGのある現在形を使わずにLGのない未来形を使う、(2) 受け身形を使うことによって、人称代名詞の使用を避ける、(3) 家族を表す言葉を新しく作り直す（例：ジェンダーを内包する「母、父、妻、夫」ではなく、ジェンダーを表さない言葉を造語する—momdad/wifeband）<sup>28</sup>。

Hall (2002:150-51)によるヒンディー語の研究では、性的マイノリティ、Hijras

---

<sup>25</sup> Anna Livia, "One Man in Two is a Woman: Linguistic Approaches to Gender in Literary Texts," in *The Handbook of Language, Gender, and Sexuality*, edited by Susan Ehrlich, Miriam Meyerhoff, and Janet Holmes, 587-603. Malden, MA: John Wiley & Sons, 2014.

<sup>26</sup> Evelyn Blackwood, "Language and Non-Normative Gender and Sexuality in Indonesia," *Queer Excursions*, 2014: 85-86.

<sup>27</sup> Blackwood, 81-100.

<sup>28</sup> Orit Bershtling, "Speech Creates a Kind of Commitment: Queering Hebrew," *Queer Excursions*, 35-61.

(女性でも男性でもない、というアイデンティティをもつ)の言語使用について面白いことが書かれている。Hijras の二人称代名詞使用において自分たちのコミュニティの中では、女性代名詞を使うが、自分たちより地位の高い、あるいは低い Hijras には、男性代名詞を使うことを発見した。Hijras のコミュニティにおける社会的地位が、言語使用を決定させるのである。これは、ヒンディー語に見られる特徴、話者が自分たちより地位の高い者(例: 神)や反対に低い者(例: 子供、家来)を呼ぶ時に、「tū」という親しみを表す二人称代名詞を使うのと同じ現象である。さらに、Hall は Hijras が3つのコンテキストで女性詞ではなく、男性詞を使うと指摘している。一つは、Hijras が男性から女性への移行前の自分のことを話す時。二つ目は、同じ Hijras と議論や喧嘩をしている時、三つ目は、感情的な怒りを表す時である<sup>29</sup>。

Kulick (1998)のブラジルでの研究では、travestis (LGは男性)と呼ばれるトランス・セックスワーカーの言語使用で、自分たちを客観的に語る時は、男性代名詞「ele」を使うが、主観的なことを話す時は、自分たちを「bicha (女性的な男性)」や「mona (純粋、純真な少女)」とお互いを呼び合う、と指摘している。さらに、男性客を相手にする時、その客たちを「maricona (受身的ホモセクシャル)」と呼び、金を要求する<sup>30</sup>。もっと最近の travestis の研究 (Borba and Ostermann) (2007)では、男性詞の使用がさらに違う場面で見られたことが報告されている。それらは、(1) 自分たちの男性だった過去を語る時、(2) 他の travestis について報告する時、(3) 家族の関係の中で自分たちについて話す時、(4) 他の travestis のグループと自分を分けて話す時、である<sup>31</sup>。

Livia (2014)のトランスセクシュアルの医師を扱った小説では、主人公が、女

<sup>29</sup> Kira Hall, “Unnatural’ gender in Hindi,” 133-162.

<sup>30</sup> Don Kulick, “Transgender and Language: A Review of the Literature and Suggestions for the Future.” *Journal of Lesbian and Gay Studies* 5.4 (1999):605-622.

<sup>31</sup> Rodrigo Borba and Ana Cristina Ostermann, “Do Bodies Matter? Travestis’ Embodiment of (Trans)gender Identity through the Manipulation of the Brazilian Portuguese Grammatical Gender System.” *Gender and Language* 1.1 (2007):131-148.

性詞と男性詞を異なるコンテキストで巧みに使い分けていることを指摘した。Georgine Noel と呼ばれる彼女は、(1) 男性に対する恋心を示す時、(2) 幸せな時、(3) シスターフッドを語る時、などは女性詞を使用した。 (1) スカウト員だった時の自分、(2) 医者としても優越感や権力を語る時、(3) 外国の官僚主義への不満、怒りを感じた時、(4) 自分がホモセクシャルではないかと不安を覚えた時、などには男性詞を使っている。このようにLGをもつフランス語のような言語でも、その文法上のジェンダーを巧みに操作し、ジェンダーの多様性、柔軟性を示すことができるのである<sup>32</sup>。

### III. 日本語におけるジェンダー表象

英語で書かれた社会言語学の入門書には必ずと言っていいほど、「日本語には、男女の性差が認められる」と書かれている。最近になって、その性差がコンテキストによりかなり複雑な現象を示すことが報告されるようになってきて、日本語における「女性語」の概念は薄れてきつつあるが、一般的に「女性」は「わたし・あたし」で「男性」は「僕、俺」を使うという「ジェンダー間での相違」の主張はどうしても取り除くことはできない。10代の若い「女性」たちが「僕・俺」を使う、レズビアンが「自分、僕、わし」を使うという研究報告が出されても、また、方言で「女性」が「俺、わし」を使う現実があっても、「女」は「わたし・あたし」、「男」は「僕、俺」を使用するのが一般的、という現実には排除できないからである。マジョリティが力をもつのは政治だけではない。「女性」の「わたし・あたし」は「普通」である、という主張は、「普通でない話者」がいることを示唆する。また、これらの言語使用を「女ことばは作られる」「女ことばはイデオロギーにすぎない」と主張しても、「女」が「わたし・あたし」を使う現実の説明にはならないし、その主張だけでは議論として前に進んでいかない。イデオロギーと言語使用の接点をど

---

<sup>32</sup> Livia, "One Man in Two is a Woman," 587-603.

う分析していくのが課題となる。「女ことばは作られる」のであれば、「トランスジェンダーのことば」も果たして「作られる」のだろうか。

日本語における「do gender」は、人称代名詞（自称・他称詞）、終助詞（文末詞）、敬語使用の分野で活発に議論されてきた。私がクィア言語学の分野で研究を始めた時、当事者が一番よく語ったのが「自称」、つまり一人称をどうするか、であった。以下に、70年代から2016年までの研究で語られてきたヘテロ話者の自称詞をまとめてみた。最近の研究では、この自称詞の使用頻度が4%にも満たないことが報告されており、人称代名詞は現実にはほとんど使われていないのである<sup>33</sup>。

	「女性」	「男性」
わたくし	もっともフォーマル	もっともフォーマル
あたくし	フォーマル	使用しない
わたし	*フォーマル カジュアル	フォーマル
あたし	*カジュアル	使用しない
うち	カジュアル	カジュアル
あたい	カジュアル	使用しない
僕	カジュアル(若い「女性」)	*フォーマル/カジュアル
俺	カジュアル(年配/地方「女性」)	*フォーマル/カジュアル
わし	カジュアル(年配/地方「女性」)	フォーマル/カジュアル(年配「男性」)
自分	カジュアル(若い「女性」)	フォーマル/カジュアル

\*使用頻度が高い

この表を性的マイノリティと比べたのが次の表である。これは、私が1999年か

<sup>33</sup> 二人称はさらに低く1.1%である。小林美恵子「日常生活」における自称詞—特徴と使い分け『談話資料：日常生活の言葉』41-72。遠藤織枝他編、ひつじ書房、2016。

らフィールドワークをして得た一人称使用の結果である<sup>34</sup>。この表が正確に現実の一人称使用を反映しているかどうかは明確ではない。というのもこのデータは私のフィールドワークから得たものであり、もしかしたら、違う現実があるかもしれない。

一人称	レズビアン	ゲイ「男性」	トランス「女性」	トランス「男性」
わたくし	最もフォーマル	最もフォーマル	最もフォーマル	最もフォーマル
あたし	使用しない	フォーマル	フォーマル (年配)	使用しない
わたし	*フォーマル	フォーマル	*フォーマル/ カジュアル	フォーマル/ カジュアル
あたし	カジュアル	カジュアル	カジュアル	使用しない
うち	カジュアル	カジュアル	カジュアル (西日本)	使用しない
あたい	カジュアル	カジュアル	使用しない	使用しない
僕	カジュアル	*フォーマル/ カジュアル	使用しない	*フォーマル/ カジュアル
俺	カジュアル	*フォーマル/ カジュアル	カジュアル(年配)	*フォーマル/カジュアル
わし	カジュアル	カジュアル	カジュアル(年配)	使用しない
自分	*フォーマル/ カジュアル	フォーマル/ カジュアル	カジュアル	フォーマル/ カジュアル

\*使用頻度が高い

今までの研究で、性的マイノリティと認識している人たちにとって、自称は「できるだけ避ける」とか「一つに絞る」とかインタビューで聞いた。ノン・ク

<sup>34</sup> トランスジェンダー女性に関しては、三橋順子氏、西田彩氏、平沢ゆうな氏から色々お聞きした。

ィアの話者にとって「自然」に使い分けをしている現実、トランスにとっては一つのハードルとなる。選択できる、という現実にはパワーなのである。私のゲイの友人は男性性を強調しなければいけない時(自分の女性性を隠すために)は、「俺」を使う、という。言葉が、ジェンダーを操作するのである。しかし親しい友人同士では自分が一番自然だと感じる「僕」を使う、と話した。私のあるレズビアン友人は「自分」を使う。「わたし・あたし」は「女っぽすぎる」し、「女」なんだから「男」の使う「僕・俺」は使いたくない、と話す。私がインタビューしたトランス「女性」のほとんどが「わたし」を使う、と話した。ある大阪で会ったトランス「女性」(仕事中は「男性」)は仕事( **public space** )は「僕」で、それ以外( **private space** )の時は「わたし」を使い分けていたが、うっかり「僕」をプライベートな時に使ってしまう「間違い」をしてからは、「わたし」に統一したそうだ。その方が精神的に「楽」だという。このように自称詞は、選択が負担になる言語領域なのだ。

#### IV. あるトランス「女性」の言語使用

##### 1. T氏

2011年に岡山大学を訪問した時に、性同一性障害者のサポートグループの何人かを紹介してもらった。そのまとめ役がT氏である。T氏とは数回話をする機会を持ったのだが、今回のデータは、2011年、12月8日にT氏が岡山放送局でインタビューを受けた時の対談である。『人権インタビュー』と名付けられT氏の「性同一性障害者」としての経験を中心に話が運ばれている。彼女は、当時49歳で大学生と高校生の子供がいて、その4年前に「性同一障害」だということを妻に話し、その後ホルモン治療を始め、現在に至っている。冒頭でアナウンサーに早速こんなことを聞かれる。

1.1 アナウンサー：今メイクされてますよね、頬の辺りが赤っぽくて口紅もされていると。メイクで何か気をつけていることありますか？

1.2 T : けばけばしたよう形にならずに自然な形でできるだけ、まあナチュラル  
にということをお心掛けております。

1.3.アナウンサー : メイクにはどのぐらい時間かかるもんなんですか？

1.4. T : えー大体 30 分から 40 分ぐらいはかかりますんですね。はい。

1.5 アナウンサー : 完成した時はどんな気持ちですか？

1.6 T : 「本来の自分に戻れたなー」って感じで。「これが私の本当の姿よ」って  
感じで。

1.7 アナウンサー : 「やっぱり姿よ」なんですね。(笑)

1.8 T : ですね。(笑) すいません。

1.9 アナウンサー : いえいえ、失礼しました。あ、そうですか。本来の姿に戻れ  
るっていう感じなんですね。

全体的にこのインタビューの文体は丁寧体で行われ、時々普通体も混じるし、  
また「～ております」のような敬語も使われる。1.1 のアナウンサーの「されて  
いる」の敬語使用は、野原さんの「心掛けております」という表現を導き、1.6  
で T 氏が「本当の姿よ」（名詞＋よ＝女性的と見られる）と語ると、1.7 で「や  
っぱり姿よ、なんですね」と女性的表現だということを T 氏に認識させる。そ  
こで T 氏は「ですね、すいません」と謝り、2 人の笑い声が聞こえる。「本当の  
姿よ」の発言をこのようにアナウンサーが聞き直す、というのは T 氏の「男性」  
から「女性」に移行しつつあるトランス「女性」としてのアイデンティティが言

語上で確認できる、ということを示している。また、1.6の「本来の自分に戻れた」というT氏の発言は性同一性障害者と認識している人がよく使う言説だと、三橋順子氏から聞いた。「男」から「女」への「移行」ではなく、本来「女」なのに、何かが間違っ「男」の体を与えられた性同一性障害者のT氏にとっては、本来の自分に「戻る」という認識は非常に根本的なアイデンティティなのである。1.2で、T氏はメイクについて「自然な形」と言うことばを使っている。この「自然」と言う言葉は、私が2で紹介するもう一人の話者が言語実践においてよく使っている。「自然」に近づきたい、「自然」でありたい、「自然」に見られたい、と言う「自然」はトランスにとって挑戦であり、到着点なのだろうか。クィア理論では、その「自然」こそが幻想である、と主張しているのだが。

その後、子供の時に母親の服を借りて女装をした話になり、それを結婚を機に止める。そこから自分の「長男」としての責任について話が進む。

2.1 アナウンサー：それで中学生、高校生ぐらいで男女の区別がはっきりしてきて、T氏ご自身としては心の中ではどうなんでしょう、自分は男性と女性とどっちだと思ってたんでしょうか。

2.2 T：うむ、、その頃はまだその自分がどうなのかっていうのを分からずにずっと過ごしてました。基本は、まあ一応男性として生まれて育ってますし、親の期待もありましたので、え、長男として生きていけなくちゃいけないというのがひとつ、ずっとこう幼い心の中に持っていました。

2.1の「男性と女性とどっちだと思ってたんでしょうか」の質問に、T氏は「その、自分がどうなのかっていうのを分からず」と答える。聞き手にとってジェンダーはまさに「男と女」しかなく、T氏が言う「どうなのかわからない」という返答は、ジェンダーの2項立制を疑問視する（あるいは、ジェンダー存在自体が不確かである）発言なのだが、ヘテロの話者にとっては、「ジェンダーは必ず

存在」し、ジェンダーには「女か男」しかないのが「自然」なのである。しかし、T氏にとっても、ジェンダーは存在するはずだし、「男と女」のジェンダーのどちらかに自分を押し入れる必要がある、と感じていることがわかる。それゆえ、T氏は自分が長男として生まれてきた「事実・現実」の話を持ち出し、自分がそれを受け入れようとした、と話す。「男」としての自分に「なろう」と努力をした、と語る。T氏の「どうなのか分からない」の発言は、ジェンダーは必ずしも「決定・固定」したものでなくても良い、「不確か・不安定」なものだ、と言うトランス・アイデンティティを表現したものなのだが、司会のアナウンサーもT氏自身も、そのことには触れず次へと話が進んでいる。T氏自身もジェンダーはどちらかに所属しなければいけないと考えていることがわかる。

ここでT氏は、「長男」と言う言葉をかなり使用しているのだが、あたかも自分に言い聞かせているような使い方をしている。それに加えて、長男としての自分のことを語る時、「やっぱ」のようなかなりカジュアルな副詞も使われている。しかしその反対に、母親の衣服や化粧を使った時の自分を語る時は、いわゆる美化語と呼ばれる「お洋服」とか「お化粧品」とかの「お」の使用が何箇所も見られた。アイデンティティが言語実践を操作するのである。

その後、妻へのカミングアウトの苦悩を語る部分が長く続くのだが、T氏は妻のことを語る時、驚くほど「敬語」を使っている。妻に「色々とお話をさせていただきました」とか妻に「そう言っていたかと」など、少しわざとらしいように聞こえるが、T氏が妻に対して「距離」を置きながらも、妻への「感謝」を敬語によって表現しようとしているのがわかる。敬語使用は「尊敬」などを表すだけではなく、反対に「距離感」を出すことによって、その物事を客観的に受け止めようとしているのでないかと、想像できる。

### 1. 漫画家：平沢ゆうな氏

普通トランスジェンダーという言葉は2つの意味で使い分けられる。一つは生まれた時に与えられた性と自分が感じる性が一致しない人全般をさす。二つ

目は、性別適合手術をしたトランスセクシャルの人と比べ、手術をしていない人をさす。ここで私が紹介するのは、その手術を済ませ、戸籍も男性から女性に変更したトランスセクシャル、漫画家の平沢ゆうな氏である。彼女は大学院で物理学を専攻し、会社勤めを3年したあと、性別適合手術をタイ（2014年）で受け、その後戸籍上の性を変更し、現在に至っている。2015年に『忘レソコナイ』で第68回ちばてつや賞（激励賞）を受賞し、2016年に『僕が私になるために』（講談社）を出版している。平沢氏は、この漫画で自分の性別適合手術の経験をかなり細かく描いている。平沢氏は、「以前の仕事の周りの人とかについては全てカットした」（「 」内は、全て、実際の平沢氏の発言）と語り、カミングアウトについて何も描いてないことを指摘すると「どうしても明るく描けない、あの、ギャグにしようと思ってどうしてもできなかつたんですよ」と話し、自分がトランスジェンダーとして生きることの大変さについて、「日本の社会が悪いという形には書きたくなかつた」と話した。戸籍上、次男から次女になり<sup>35</sup>、極めて具体的に「女性」になった過程を語った。服装、化粧、電話での話し方、ボイストレーニングなどの話をしたあと、彼女の言語実践について綿密に語った。

基本的に彼女の言語実践 は、(1) (affective stance) 「自然で、演技をしない、演技であってはいけない」；(2) (epistemic stance) 「私を女性として接してくれている人たち」と「私に性別移行した元男性として接している人たち」に対して使い分けることである。(1)の「自然で演技をしない」部分では、「断定しない」「『だ』を避ける」、文末詞は「ね」を使うように心がけている、と言う。「ね」を使うと「パス度が上がる」とも言う。また、自称詞は「わたし」で、小学校高学年の一時期「俺」を使ったが、「それは演技だった」「あまりにも、しっくりこなさすぎて、あとはずっと『僕』でした」と語った。

私は2016年の10月から2017年の5月まで、平沢氏とは一ヶ月に最低1回

<sup>35</sup> 彼女には妹がいるのだが、戸籍上は次男から次女になったので（長女にはなれない）、年下の姉がいることになった。

(3 時間ほど)は会い(私の早稲田のアパート)、ビデオ録画とデジタルヴォイスレコーダーの両方を使って会話データを収集した。また、外で食事をしたりもした。その後インタビューの文字化をして、彼女が語った言語実践が実際にその通りかを確認した。彼女が言った「ね」の使用は確かに多かったが、「よ」の使用もかなりみられた。(2)の「私を女性として接してくれている人たち」については、平沢氏は「男性特有の言い回しや、汚い言葉を避けます」と話し、そのために「断定の助動詞で終わったり、逆説に『が』を使ったり、乱暴な言い方をしたり」することを避けると言った。平沢氏が感じる「現実世界の男性の話し方」の特徴だと言える。さらに平沢氏は、次のように語った。「自分を主張しすぎない、とか、理屈をこねない、なども入れると世の人たちが女性として持っている印象に近づくかもしれないですけど、私個人の性格に合わず、苦痛ですし、実際の女性はそんな人ばかりではないので、逆に私は演技してるなあ、って印象を持ってしまいます。相手が生粋の女性だろうと、MtF だろうと」。いくら断定的には言わない、と話していても、自分の持つ言語上のルールを破ることはできないのである。ここで、「生粋」という言葉を使っているが、平沢氏は性的マジョリティの人を語る言葉についてこう話した。

平沢：「場合によって使い分けてますけど、最近、ちょっとああ、本当は『普通の人』っていうのが一番てっとり速いんですけど、やっぱり、あの、ちょっとやっぱり、『普通』というと、『攻撃的』になってしまうんで。

その後、「生粋」という語彙についてこう語った。

平沢：「表現がなかなかあの、秀逸で面白いなあ。まあ、『う、うまいな』、あの言い方が普通に。『生粋江戸庶民』とかっていうじゃないですか。何か、誇らしげに。で、それを性別に当てはまると、あの、というのが、面白かったのと、意外で。言われて、確かに。まあ、あの不快に思うかどうかは別にし

て、否定的には事実ではあるじゃないですか。『私は生粋では確かにない』と。でやっぱ、あの、そういう意味では、『普通』か『普通でない』って言ったら、主観の部分が入りますけど。生粋か生粋でないか、と言ったら、客観性がかなり強いので、そういう意味でその言葉を使う時は結構ありますね。」

この他にも「私たちの界限でない一般的な方々」とかを使うこともあるらしい。「ヘテロ」はあまり使わないそうである。

さて、「私に性別移行した元男性として接している人たちへの配慮」として、平沢氏は「女性特有な言い回しや、女性をわかったような言葉や内容は避けます」と語り、その例として「男の人」「女はそうよ」と言った表現は絶対使わないと話した。私は「男の人」という言葉はとてもニュートラルな表現だと思っていたので、それを使わないという点には非常に驚いた。平沢氏は、その理由をこう話した。

平沢：「最初のうち、性別移行したての頃は、結構気をつけてたワードですね。

…『男の人』という言葉は意識が届く範囲であまり使わないようにしていますね。…性別移行前の知り合いや友人の前では、『男』や『男性』『男性の方』などを使います。『男の人』という言葉は、女性がよく使う言葉で、男性は自分たちのことを『男の人』とは呼称しないからです。…私が性別移行をする前からの知り合っている、例えば、この前のFさんとか、の前で、つるつと出てしまうと『あ、しまった』と思うことはありますね。性別移行してから知り合った方は、あまり意識しないですけど、する前の人には、え、『男の人、とかみたいに、言っちゃうの』とかそういう風に思われたら、ちょっと嫌か、とか思って。…今も、『男の人』とかいう場合は、自分がまず『女性である』という立場を大前提とした上で、いうわけじゃないですか。『女としてみた男の人』っていうのが、すごく強いイメージじゃないです

か。『私は女だから、こう見ます』とか、っていうのが暗に含まれているような気がして。性別移行前の友人には、私はとにかく、『お前...何、女ぶってるの!』とか思われるのが嫌ですし、怖いので、なるべく男性時代と違う言葉を使わないように意識している、ということです。逆に性別移行後に知り合った人とは『男の人』は使いますし、女同志で話が盛り上がった時には、『男なんてねー』と使います。結局、その時も、『...と元男がいうのもなんですけど』とかエクスキューズを後ろに入れてしまいますけどね。」

私は、このことを聞いてから、シスジェンダーの「男性」に必ず「男の人、って使います?」と聞くことにしている。確かに、誰も使わないと答えている。「男性」は自分のことを語る時「男の人」とは言わないのである。これは非常に大きな発見だった。では、「女の人」の使用はどうだろう。

平沢: 『女の人』に関しては、あんまり意識してないですね。『女の人』は女性だけでなく、男性も使いますからねえ。私が使っても違和感を持つ人はいないでしょう。まあ、当たり障りないですね、一番。」

「女」という言葉はどうだろう、と私が尋ねると、平沢氏は「私が『女はねえー』とか、っていうと、それはそれでいいんですけど、照れてしまう可能性がある」ので使わないという。また、「ぶりっ子、と思われかねない過度な仕草」は避け、その理由として『女ぶって』と思われるのは嫌なので、ただ、最近では女性として見てくれている人が周りに増えたので」と話し、私に「性別移行した元男性として接している人たちへの配慮という、意識は少し弱まりつつあります。結局何事もバランスですね」と語った。

### 3. 「T」のカテゴリー

最初に「LGBT」の「T」は違う、というトランスジェンダーの人たちの声を紹介したが、平沢氏もこのことについては述べている。この会話では、もう一人インタビューに参加した人(トランス男性のA氏)がいたが、A氏は「人口の7%、Tは、違う。ゲイの人と話していると、違う。『体の違和感って何?』と言われて、一切分からない、と言われると…」と話し始めた。すると平沢さんがこのように話し始めた<sup>36</sup>。

平沢：「でも私たちも同性愛の人が分からない。ただ違う、ということ認めた上で、えっとLGBTというカテゴリーに賛同するか、しないかは意見が分かれているところです。同性愛の方々はえっと、トランスの人は、自分は同性愛じゃないか、と悩む人も多い。その過程を経ている人もいるし、周りからも言われているので、あの、結構、同性愛じゃない、っていうイメージを持った上で、TGだというんですけど、でも同性愛の方々はTGの、あの、ことを知らない方も多いで。そう、同性愛の方々とTGとでは、認識の差があるかもしれないですね。…勉強してないな、っていう人(TG)はあんまり会ったことはないですね。TGというのは、同性愛と違うのは、社会的な接合部分が同性愛より多い。同性愛の方々は、言ってしまうと恋愛と結婚の過程のところがあるんですけど、TGっていうのは、それは、もちろん全部ありますし、に加えて自らの性自認、パスとか社会としてのジェンダーで、戸籍とかプラスαで乗っかかってくるので、まあ、そのカテゴリーが苦悩するカテゴリーがちょっと広いっていう意味ではTGの方がより勉強しないと。社会的に乗り越えなくちゃいけないハードルが、の数が多、という意味では、TGは、の方が数は多いように思いますね。」

<sup>36</sup> Iさんは、人口の7%ぐらいがLGBTだと考えている。

ここでの平沢氏は、「同性愛」と「トランス」を比較しているのだが、最初は、「同性愛の人」と言ったが、その後「同性愛の方々」が何度も使用され、「トランスの人」とは違ったフレームで語ろうとしている。話者が距離を置こうとしていることが明らかである。また、相手のことを少し批評している内容なので、「方々」を入れた方が批判しやすい、という言語上の操作もある。

またさらに、TG（トランスジェンダー）とTS（トランスセクシュアル）の違いについて問いかけると、平沢氏は「外部の人にはTGやTSの区別はない。区別は障害になる」とはっきり言った。

#### 4. 性別移行の前後

平沢氏からは、性別移行前後の様々な話を聞くことができた。10代からの話では、「もともと、ちょっと『なよっちい、ぼかった』から、もともと、ちょっとあまり男らしくなかったというか...昔からあの、で、犬に話しかける言葉の時に、あの『オネエ』になってるって言われたってことはありますね...私も別に最初にして、でも感じた時にまあ、自分の気の迷いだろうとか、あ、まあ客観的に見たら男だし、とかそう言う理解があったので...割と女子社員の間では、『女子力の高い』と、男性社員の間では『同性愛者』だと呼ばれていたらしく。」と話した。この時の会話にはまた別の参加者（平沢さんの女性の元同僚F氏）がいたのだが、以下の後半の部分はF氏に語りかけているのがわかる。普通体基調で語っているからである。

平沢：「転職したみたいなのりだと。だって仕事だって選べるんだから、性別も選んでいいんじゃないんですかね。あのね、生き方選ぶ、ですから、みんな、な。それまでは、ちょっと、無難な方、無難な方について、いったん...それは、今は楽しいよ。S社は確かに安定だけだったね。だから安定してた、あの、まあ、『動物園の檻に入りたいんですか』というのと同じよね。自由はないけど、一生食いつぱくれない、ですよ、という。」

ついで、性別適合手術についての話に移る。

平沢:「自分の体への嫌悪感が一番というのと、どれも平均的な理由なんですけど、幾つかあって。そん中の一つとして、まあ、自分の体の嫌悪感がとても強いんですね。あとは、やっぱ、社会的にハードルが、それによって下がる。というのと、まあ、私は割とカウンセラーの人に言わせると、あの、石橋を叩いて、叩いて渡ろうと思う、と。最後まで渡ろうとするタイプらしくて。だから、ここら辺で、自分は後戻りするという考えは、あんまりなかったですね。理解してもらいにくいです。... あの、やっぱ、改めて会う人、新たに会う人には、SRSをしている、というようなことを言うと、最初っから女性としてみてくれる人が多かったなあって。あと、多分MtFさんでも一部のB氏みたいなの、あのSRSをした人と、してない人っていうので、何かちょっと、また一つあの、私たちは、あなたたちとは違う、っていう戦争が起こっている、っていう。でも手術しても、手術そのものの大変さよりも、手術に踏み出すまでの覚悟が強い、大変で、というのもあとから『やっぱ違った』は絶対あってはならない手術なので。私もすごい調べたんですけど、世界で何人かやっぱり、SRSを後悔した、という方がいらっしやるので、で、そこは、かなり、慎重にならざるを得ない、で、私はそこについて、すごく向き合ってたんですけど、かなり。まあ、でもした時に後悔するかな、っていうのを常自分に言い聞かせながら、向き合って、結果『多分後悔はしない』で、『仮にしそうになっても、しないようにしよう』って思って、やったんですよ。で、結局、後悔は全くない、っていう。清々しい。強いて言えば、まあ、子供ぐらい欲しかったなあーという。...でも結構晴れ渡りますよね。曇っていた空がパーっと明るくなる感じがなんか、それまで、曇りしか知らないから、こんななんだ、なんてみたいなの、そう、曇りしか知らないの、晴れてることがわかんないので、あの、みんな、こうなんなのだろう、と言

う認識しかなかったんで、私。」

## V. まとめ

ここでは、T氏と平沢氏という異なる2人のトランスジェンダーの人たちの言語実践について書いてきたが、T氏と違って、平沢氏とは9ヶ月の長い付き合いだったのと、お互いかなりフランクにいろいろな話ができたと、思っている（実は文字化がまだ70%しか終わっておらず、この話はまだまだ続くのである）が、最後に平沢氏が言った言葉を少し考えてみたい。

平沢：「私は単純に性指向がヘテロセクシャルに該当する。単純に私は女性として男性が好き。ジェンダーフリーは困るんです。」

トランスジェンダーが投げかける一つの問題として、果たして、「トランスジェンダーはヘテロ・ノーマティビティを再生産する存在なのか」あるいは「男女の2項立制を破壊するものなのか」の議論がある。確かに、平沢氏のジェンダー観をみてみると、彼女の中には確固とした具体的女性像が存在し（化粧の仕方、服装の選び方、話し方）、それに近づき、維持しようとしている（「自然」になるように）。しかし彼女にとっては、「終わり」がない。性別適合手術も済ませ、法律的にも女性になり、どこからみても女性の彼女が、現在でも過去の自分を知っている人と知らない人に対して「継続的に」言語実践の上で認識操作（例：「男の人」を使わない）をしている。「ジェンダーフリーは困る」と言いながら、意識の中で今の自分のジェンダーと過去のジェンダーの間を行き来し、ジェンダーの安定性を模索しているようにもみられる。平沢氏が、自己内のジェンダーの一貫性を求めれば求めるほど、固定化されたジェンダーなど「存在しない」現実と直面することになってしまうのか。平沢氏のこの言語実践は、ジェンダー・アイデンティティの不安定性をまさに我々に知らしめている。